

(文献検討)

国内文献にみる高齢者のリロケーションに関する研究の現状と課題 －リロケーションの理由とリロケーションダメージに着目して－

The current situation and issues regarding relocation of the elderly people discussed in the academic paper in Japan: Focus on the reason of relocation and relocation damage

赤星成子 田場由紀 山口初代 砂川ゆかり

キーワード：リロケーション、高齢者、高齢者ケア、場、施設

Key words : relocation, elderly person, elder care, familiar place, nursing home

I. はじめに

わが国は、超高齢社会を見据え地域包括ケアシステムの構築を目指している。地域包括ケアシステムの構築は、可能な限り住み慣れた地域で住み遂げられるように医療、介護、介護予防、生活支援、住まいの5つの構成要素を示し、地域の実情に応じて、推進することである(厚生労働省, 2013)。

治療の場では、第4次医療法の改正に伴い在院日数の短縮化が図られた。医療機関では、早期退院に向け退院支援を推進する部署が設けられ、治療の終了と共に医療や介護度の高い高齢者は、退院先として、慢性期病院、介護施設や自宅だけでなく、有料老人ホームやグループホームなど多様な地域の生活の場など選択肢が広がった。介護度が重度化し独居や自宅での生活が困難になった高齢者は、介護サービスを受けるために住み慣れた生活の場を離れ、自宅から遠く離れた施設や子ども達の住む場所へとリロケーションを余儀なくされる。

瀬崎(2014)は、住み慣れた場所は、私たちのルーツを構成し、生活の営みを支える力となり、人間にとってのアイデンティの源であると述べている。また、旧来から「老梅は移すべからず」との慣用句があるように、高齢期を生きる人たちの生活は老梅のように根を下ろし、場になじみながらそれぞれの人生史を築いている。そして、要介護状態になっても、人は住み慣れた地域で可能な限り住み続けたいと願うものである。住み続けることは、稲葉(2011)が述べるように、つながりの中で生み出される価値としての社会関係資本(ソーシャルキャピタル)の中で営まれる生活を可能にする。

したがって、高齢者が社会的役割を持ち、生きがいを

持って社会参加できるような社会を目指すために、リロケーションに関わる現状を把握し、高齢者ケアの方向性について検討する必要があると考える。

本研究では、国内の文献によって、高齢者のリロケーションの理由とリロケーションダメージに着目して、研究の現状を整理し高齢者ケアの方向性について考察することを目的とする。

文献検討の視点は、①高齢者のリロケーションは、どのような理由があつてなされるのか。②リロケーションは、高齢者にどのようなダメージを与えるのだろうかである。

用語の操作的定義

1) リロケーション：住み慣れたこれまでの地域や生活空間、人との関係性の中での生活を離れ、新たな場所へと生活に移すことである。それは、生活空間の変化、対人環境の変化、自己の生活の変化を伴うものである。通常、「呼び寄せ」、「転居」、「移住」、「移転」、「リロケーション」の用語が使われている。

2) リロケーションダメージ：それまで暮らしてきた物的・人的環境から離れ、新たな環境での生活によって引き起こされる身体的・精神的・社会的な痛手のことである。

II. 研究方法

1. 分析対象文献の選定

研究対象となる国内論文の選定は、以下の手順で行った。文献検索のキーワードは、「看護」と「リロケーション」、「呼び寄せ」、「転居高齢者」である。データベースは、検索年の制限をせず、医学中央雑誌 Web 版 (Ver5) を用いた。「看護」と「リロケーション」で 42 件、「看護」と「呼び寄せ」で 22 件、「看護」と「転居高齢者」で 3

表 1. 分析対象文献の一覧

	著者	タイトル	研究の目的
1	水野敏子 (1999)	東京近郊に転入したいいわゆる「呼び寄せ老人」の介護者の負担感とその関連要因の分析	「呼び寄せ老人」の呼び寄せる前の状況と主介護者の負担感に影響する因子を明らかにすること
2	工藤禎子他 (2006)	都市部における高齢者の転居後の適応と関連要因	転居高齢者の適応の状況とその関連要因を明らかにすること
3	斎藤民 (2006)	高齢転居者に対する社会的孤立予防プログラムの実施とその評価の試み	社会的孤立から「閉じこもり」になる可能性が指摘される高齢転居者を対象にネットワークづくりと地域に関する情報の活用を目的として支援プログラムを開発・試行し、その有用性を検討すること
4	兎澤恵子 (2006)	高齢者の住環境移動による自尊感情の実態調査-呼び寄せ高齢者と地元高齢者の比較-	子どもの元へ住居を移動し、地域で生活を送っている「呼び寄せ高齢者」の自尊感情を地元高齢者との比較によって実態を明らかにすること
5	工藤禎子 (2008)	都市部に引っ越した要支援・要介護高齢者の生活変化と心身の状態	要支援・要介護高齢者の引っ越し前後の支援のあり方を検討するために、引っ越し後の要支援・要介護高齢者は、介護認定無しのものに比べ、生活変化、心情、健康状態、ソーシャルサポートおに関してどんな特徴があるかを明らかにすること
6	千葉和夫 (2011)	リロケーションダメージからの回復過程とレクリエーション活動支援との接続に関する考察-被災された高齢者の方-	被災しリロケーションを余儀なくされている高齢者が「自分らしく生きる」「自分の良さを見つけて生きる」ことにつなげるためにレクリエーション活動を通して支援を行うこと
7	中西一葉 (2012)	高齢患者の自宅退院における「予測内」、「予測を超える」ダメージリロケーション第四形態の存在とリスク要因	退院後に様々な要因で再入院する高齢患者の存在から、第4のリロケーション形態として「施設から家へ」という形態について明らかにすること
8	中西一葉 (2012)	高齢患者の自宅退院における「予測外」のダメージ リロケーション第四形態の存在と要因	高齢患者の自宅退院における「予測外」のダメージについて検討すること
9	中西一葉 (2013)	高齢患者自宅退院支援のツールに関する課題 リロケーション第四形態時のダメージ軽減を目的とした包括的システムの開発に向けて	高齢患者の自宅退院支援ツールについて検討すること
10	小松美砂他 (2013)	認知症高齢者の施設へのリロケーション 適応に関連する要因と早期介入	認知症高齢者の施設へのリロケーション時の適応に関連する要因を明らかにし、早期介入方法を提案すること
11	古田加代子 他 (2013)	女性主介護者からみた呼び寄せ介護の経験の特徴	本研究の目的は、離れて暮らしていた老親を呼び寄せ介護している女性主介護者の視点から、介護経験を検討しその特徴を明らかにすること
12	小松美砂他 (2013)	高齢者施設へのリロケーション時の適応課題と対処行動	高齢者施設への移転により生じる高齢者の適応課題と対処行動を明らかにすること
13	渡邊美保他 (2014)	リロケーションの概念分析	本研究では、リロケーションの概念分析を検討し、看護におけるリロケーションの活用の有用性を検討すること
14	古田加代子 他 (2015)	転居高齢者の要介護度悪化に関連する要因の検討	本研究は65歳以上で転居した高齢者の要介護度の悪化に、転居時の状況および転居後の生活変化がどのように関連するのかを明らかにすること
15	渡邊美保他 (2015)	災害後の高齢者のリロケーションケアに関する文献レビュー	本研究では、災害後の高齢者のリロケーションケアに関する文献レビューを行い、災害時の高齢者のリロケーションケアの示唆と今後の研究への展望を明らかにすること
16	小松美砂他 (2015)	日本における施設移転後の高齢者の適応	高齢者達のリロケーションに対する適応の特徴を明らかにすること
17	古田加代子 他 (2016)	転居高齢者の生活適応の経過に関連する要因 ライフ・ライン・メソッドを用いた検討	本研究は、都道府県の境界を越えて子どもとの近居または同居を目的として転居してきた高齢者を対象に、生活適応の経過と関連要因について明らかにすること

表2 高齢者のリロケーション文献に見る研究目的

ID	研究目的のコード	カテゴリー
14	転居した高齢者の要介護度の悪化	
8	自宅退院における「予測外」のダメージ	
12	移転により生じる高齢者の適応課題	
14	生活変化と介護度悪化の関連	リロケーション後の高齢者の心身機能低下
9	リロケーション第四形態時のダメージ	
7	再入院の患者と施設から家へのリロケーションダメージ	
1	呼び寄せ老人の呼び寄せる前の状況	
16	リロケーションに対する適応の特徴	
10	施設へのリロケーション時の適応に関連する要因	
17	転居した高齢者の生活適応の経過	転居高齢者の適応に関連する要因
17	生活適応の経過と関連要因	
2	適応と関連要因	
2	転居高齢者の適応の状況	
4	呼び寄せ高齢者と地域高齢者の自尊感情	呼び寄せ高齢者の自尊感情
1	介護者の負担感に影響する因子	呼び寄せ高齢者の介護
11	呼び寄せ高齢者介護の特徴	
9	包括的ケアシステムの開発にむけての支援ツール	
3	高齢転居者への閉じこもり予防支援	
5	要介護高齢者の引っ越し前後の支援のあり方	
5	要介護高齢者の引っ越し前後のソーシャルサポートの特徴	高齢者のリロケーションケアの方略
6	リロケーションダメージへの対処	
15	リロケーションケアの研究への展望	
15	災害時の高齢者のリロケーションケア	
13	リロケーション概念分析	リロケーション概念の有用性
13	リロケーション概念の活用	

注) 一論文に目的が複数ある場合はすべて記載した。

件、計 67 件の文献が検索された。67 件の文献から、テーマや内容が看護との関連や高齢者のリロケーションでないもの、本研究の目的に照らし内容が読み取れないもの、研究方法、結果や考察の詳細が読み取れない会議録、重複した文献を除き、計 17 件の文献を分析対象とした。

2. データの収集と分析

研究の概要を把握する為に、分析対象とした 17 の文献を、ID 番号、著者、論文のタイトル、研究目的で整理し、分析対象文献の一覧を作成、研究目的を本文から取り出し整理した (表 1)。

リロケーションの理由については、文献を精読しながら高齢者が住み慣れた場所を離れなければならない理由を本文から読み取り、コード化した。リロケーションダメージについては、生活の変化、困ったこと、身体的・精神的・社会的ダメージという側面から本文の結果から表現内容を読み取り整理した。量的研究でなされた文献からは、調査票の質問紙の項目に対する回答結果から読み取りコード化した。例えば、転居の理由、転居時の状況と転居後の要介護度悪化の有無、転居後の日常生活の変化、介護度の悪化の有無等の調査項目への回答から読み取りコード化した。それぞれコード化した内容は、質的・

帰納的に類似するコードを集めてカテゴリー化した。文中では、コードを< >、サブカテゴリーを<< >>、カテゴリーを【 】で表示する。

III. 結果

1. 研究目的から見た文献の概観

研究目的は、25 のコードから 6 つのカテゴリーに整理できた (表 2)。

【リロケーション後の高齢者の心身機能低下】は、<転居した高齢者の要介護度の悪化>、<自宅退院における「予測外」のダメージ>、<移転により生じる高齢者の適応課題>、<生活変化と介護度悪化の関連>などを目的としていた。【転居高齢者の適応に関連する要因】は、<リロケーションに対する適応の特徴>、<施設へのリロケーション時の適応に関連する要因>、<転居した高齢者の生活適応の経過>、<生活適応の経過と関連要因>を目的としていた。【呼び寄せ高齢者の自尊感情】は、<呼び寄せ高齢者と地域高齢者の自尊感情>、【呼び寄せ高齢者の介護】は、<介護者の負担感に影響する因子>、<呼び寄せ高齢者介護の特徴>を目的としていた。【高齢者のリロケーションケアの方略】は、<包括的ケアシステムの開発にむけての支援ツール>、<高齢

表3. 高齢者のリロケーションの理由

ID	高齢者のリロケーションの理由のコード	カテゴリー
17	病気で生活に対する不安、どちらかというとなかなか	生活をする上での不安
2	独居や老夫婦での暮らしが不安だったため転居した	
17	病気で生活に対する不安があり自ら希望したため転居した	
11	生活するうえで不安があったため転居した	
12	毎日の家事が困難であったため入所した	心身機能の低下
5	退院後介助が必要で仕方なく入所した	
1	歩行に介助が必要、生活の自立が困難になったため施設へ入所した	
12	自宅で生活ができず「ここにいるしかない」というあきらめの気持ちで施設入所した	
12	不安を感じる身体機能の低下があったため入所した	
3	身体機能の低下のため呼び寄せられた	
2	自分の病気や障害がきっかけで入所した	
5	子どもとの同居・近居のため転居した	
2	立ち退きなどの住宅事情があったため転居した	
14	退職で社会的役割を失ったため転居した	
2	仕事の都合で転居が必要になったため転居した	
2	配偶者などの離・死別があり転居した	
1	介護者が病気になったため入所した	
2	家の建築・購入のため転居した	自らの意思決定
13	やむを得ない理由：立ち退き、改築のため転居した	
11	転居することを自分が望んだ	
2	好きな場所に住もうと思ったため転居した	
2	通院や買い物の便利さを求めたため転居した	
2	知ってる場所だったため転居した	
8	本人の強い希望で自宅退院した	
7	夫の介護をしてきた経緯があり、自らの意思で自宅退院した	
7	本人の希望で自宅退院した	
1	入所によって活動範囲が広がり生活が豊かになると思って入所した	
7	本人と家族の強い希望で自宅退院した	
7	本人は退院への不安があるが家族の希望により自宅退院した	

* リロケーションを本文の言葉を用い「転居」、「退院」、「入所」と表現した。

転居者への閉じこもり予防支援>、<要介護高齢者の引越し前後の支援のあり方>、<要介護高齢者の引越し前後のソーシャルサポートの特徴>、<リロケーションダメージへの対処>などを目的としていた。【リロケーション概念の有用性】は、<リロケーション概念分析>、<リロケーション概念の活用>を検討し活用の示唆を得るための研究であった。

2. 高齢者のリロケーションの理由

リロケーションの理由は、30のコードから5つのカテゴリーに整理することができた(表3)。

【生活をする上での不安】は、<病気で生活に対する不安、どちらかというとなかなか>、<独居や老夫婦での暮らしが不安だったため転居した>などがあ

った。【心身機能の低下】は、<退院後介助が必要で仕方なく入所した>、<歩行に介助が必要、生活の自立が困難になったため施設へ入所した>などがあつた。【社会的事情】は、<子どもとの同居・近居のため転居した>、<立ち退きなどの住宅事情があったため転居した>、<退職で社会的役割を失ったため転居した>などであった。【自らの意思決定】は、<転居することを自分が望んだ>、<好きな場所に住もうと思ったため転居した>、<通院や買い物の便利さを求めたため転居した>、<知っている場所だったため転居した>などがあつた。【自宅退院への希望】は、<本人と家族の強い希望で自宅退院した>、<本人は退院への不安があるが家族の希望により自宅退院した>があつた。

リロケーションの意思決定は、転居先への求めがある

表4. リロケーションが高齢者にもたらすダメージ

ID	リロケーションが高齢者にもたらすダメージのコード	サブカテゴリー	カテゴリー
1	施設入所で身体機能の低下 歩行状態 (独歩・杖歩行)から寝たきりが増えた		
8	入院することで身体能力とADLの低下が見られた		
9	痛み、不眠、食欲低下などの身体症状が現れ頻繁な通院となる		
8	退院後の独居生活で急な活動量増加による患部の痛みが起こった		
8	自宅退院後、転倒による骨折で再入院した	環境の変化による身体症状の悪化	
8	食事の不適切な管理による食欲低下と脱水を起こした		
9	退院後服薬管理ができず病状が不安定になった		
9	病状が悪化し再入院となった		
13	転倒による骨折、再入院		身体的側面のダメージ
9	身体機能の低下：歩行状態：杖歩行・独歩が3割から1割に減。寝たきりが1.5割から3割に増えていた。		
9	呼吸苦、下肢筋力低下で外出困難で生活していく上での困難があった		
9	心不全増悪で活動の制限があった		
8	活動制限からくる生活への支障をきたした		
9	自宅退院後十分な食事がとれなくなった	身体症状の悪化からくる生活への支障	
9	症状の悪化で生活の乱れ、室内にゴミ散乱し不衛生な状態になった		
9	生活様式の変化 (量での生活) と症状悪化による生活の不具合があり体力が消耗した		
13	家事、買い物、メニューの選択、調理、御膳の準備や後片づけなど、慣れ親しんだ作業や日課が崩れた		
12	転居先の環境は事前に知らされていないかった		
15	自尊心の低下：「自分がてんでだめだ」、「自分が失敗者だ」	自尊心の低下	
15	自尊心の低下：転居が自己選択ではない、役割がもてない、後悔：自己受容が低い、友達：内面的なよりどころが持てない		
6	寂しい・気が滅入る		
6	いらいらしやすい、苦しい、辛いなどの感情が生じる	不安定な感情	
8	独居からくる精神的な不安感を持つ		
11	施設職員がケアで困ることがある：怒る、泣くなど興奮する		精神的側面のダメージ
8	精神的な不安からくる抑うつ状態になった		
11	無気力・無関心といった症状が出現する		
1	人との付き合いが減少した		
1	精神機能：中等度から重症が増えていた	精神活動の低下	
9	退院後、腰が痛い、体調が悪い、食欲がないことからくる不安を持った		
9	入退院を繰り返すことによる精神活動の不活発になった		
9	認知症悪化 (判断力が低下した)		
15	環境になじめない		
4	転居により「慣れている状況」から「慣れていない状況」に変化した		
2	住宅 (建物の構造) が使いにくい		
13	座席が決められていること、調理法が異なることでの心理的な負担感を！持った		
6	新しい生活になれない		
11	「ここが嫌だ」という施設生活を受け入れていない言動	なじめない環境	
2	周りの環境がわからず外に出ることが難しい		
13	施設での決まった生活は、スケジュールがあり、時間に追われ、施設の枠組みに押し込まれ自分のこれまでの生活との違いに違和感をもつ		
13	ケアハウスは年寄りの住む場所、「まだその世界に入れない」違和感や葛藤		
6	建物 (住宅) の構造が使いにくい		
11	「家に帰りたい」という帰宅願望がある		
12	以前行っていた家事を実施していない		
12	庭の手入れ・畑仕事をやめ実施していない		
12	地域活動を実施していない	役割・活動の喪失	社会的側面のダメージ
12	今まで行ってきた趣味をやめ実施していない		
12	今まで行ってきた散歩を実施することができなくなった		
13	今までしてきたことをしなくてよくなり戸惑いがある		
6	地域活動への参加が減った		
6	周りの環境がわからず家から外に出られなくなった		
6	親戚・友人との行き来が減った		
1	買い物からデイケア、通院、散歩へと外出先が変わった	活動範囲の縮小	
1	外出頻度は週1回以上が5.5割から4.5割へ減、週1回以下が5.2割から4.2割へ減った		
6	外出日数が少なくなった		
2	家族への気兼ねがある		
2	近所の人との付き合いに気を使う	他者への気づかい	
9	介護者である同居する夫への気づかい		
9	独居をサポートできる身内や知人がいないため生活への支障	独居生活での支障	
2	暮らしにお金がかかる	経済的負担	

積極的な意思決定、心身機能や生活への不安による消極的な意思決定、家族や関係者の希望、やむなき事情による決定があった。

3. リロケーションが高齢者にもたらすリロケーションダメージ

分析の結果、リロケーションダメージは、58のコード、11のサブカテゴリー、3のカテゴリーで構成された(表4)。3つのカテゴリーは、【身体的側面のダメージ】、【精神的側面のダメージ】、【社会的側面のダメージ】であった。

【身体的側面のダメージ】での《環境の変化による身体症状の悪化》は、〈施設入所で身体機能が低下し歩行状態は(独歩・杖歩行)から寝たきりが増えた〉、〈入院することで身体能力とADLの低下が見られた〉、〈痛み、不眠、食欲低下などの身体症状が現れ頻繁な通院となる〉など施設入所や入院することでの心身機能の低下があった。《身体症状の悪化からくる生活への支障》は、〈呼吸苦、下肢筋力低下で外出が困難で生活していく上での困難があった〉、〈心不全増悪で活動の制限があった〉、〈活動制限からくる生活への支障をきたした〉など、身体機能の低下が生活や活動へ影響を及ぼしていた。

【精神的側面のダメージ】での《自尊感情の低下》は、〈転居先の環境は事前に知らされていなかった〉こと、〈自尊感情の低下:「自分がでんでだめだ」、「自分が失敗者だ」〉と生きていく上での自信がそがれ、ネガティブな気持ちを持つにいたっていた。《不安定な感情》は、〈寂しい・気が滅入る〉、〈いらいらしやすい、苦しい・辛いなどの感情〉を生じさせていた。《精神活動の低下》は、〈精神的な不安からくる抑うつ状態〉、〈無気力・無関心といった症状〉を引き起こしていた。

【社会的側面のダメージ】での《なじめない環境》は、〈環境になじめない〉、〈転居により慣れている状況から慣れていない状況〉、〈住宅(建物の構造)が使いにくい〉、など環境になじめない気持ちを持っていた。《役割・活動の喪失》は、〈以前行っていた家事を実施していない〉、〈庭の手入れ・畑仕事をやめ実施していない〉、〈地域活動を実施していない〉など今まで行ってきた仕事や活動を失っていた。《活動範囲の縮小》は、〈周りの環境がわからずに家から外に出られなくなった〉、〈親戚・友人との行き来が減った〉など活動範囲が狭まっていた。《他者への気づかい》は、〈家族への気兼ねがある〉、〈近所の人との付き合いに気を使う〉など、周囲の人達へ気遣う生活を余儀なくさせられていた。《独居生活での支障》は、〈独居をサポートできる身内や知人がいない生活への支障〉を体験していた。《経済的負担》は、〈暮らしにお金がかかる〉ことに対する負担感を感じていた。

IV. 考察

1. 高齢者のリロケーションの理由とリロケーションダメージ

リロケーションの理由は、【生活をする上での不安】、【心身機能の低下】、【社会的事情】、【自ら意思決定】、【自宅退院への希望】があった。高齢者の場合、【自ら意思決定】、【自宅退院への希望】であっても、【生活をする上での不安】、【心身機能の低下】、【社会的事情】が高齢者のリロケーションの理由を左右しているように考えられた。

老年期の発達課題は、これまでの人生の受容と統合、それに対する絶望とのバランスを取りながら生きる(エリクソン著、朝永ら訳、1999)ことである。高齢者にとってのリロケーションは、長年生きてきた生活の場の、その連続性・個性・地域性・全体性が断たれ、新しい場所でそれをつなぎ直さなければならないことを意味する。それは人生の受容と統合に逆行しアイデンティの混乱を招きかねず、発達課題を克服しづらいものにしかねないと考えられる。

図1は、「リロケーションダメージ」のカテゴリーの空間配置によって構造化を試みたものである。それは、リロケーションによる環境の変化は【身体的側面のダメージ】、【社会的側面のダメージ】、【精神的側面のダメージ】を招き、とそれぞれが相互に関連しながら影響しあっていると考えられた。

リロケーションによって高齢者は、《環境の変化による身体症状の悪化》と《身体症状の悪化からくる生活の支障》という【身体的側面のダメージ】と、《活動範囲の縮小》、《独居生活での支障》、《経済的な負担》をもたらし、《なじめない環境》で《他者への気遣い》をしながら《役割・活動の喪失》など【社会的側面のダメージ】を体験していた。その結果として《不安定な感情》になり《自尊感情が低下》することで、《精神活動の低下》をもたらす【精神的側面のダメージ】をきたすという悪循環が考えられた。

人が場と共にある生活の中で活動や役割を喪失することは、自尊感情やその人らしさを剥奪させるものである。また人は家や地域という場の中で役割を担い所属感を持つこと、地域社会という場の中に自分自身の居場所や存在の意味を確認することで、自分自身のアイデンティが保て、安心して場に住み続けることができると言われている(園田,2002)。そのことは、大谷(2013)が場所と個人のアイデンティの観点から、「場所が自己アイデンティの内容を形成し、自尊心・自己効力感を維持する」と述べているように、住み慣れた場所や社会は、過去から現在につながる時間の中で、無意識の中に人が生きることを支え、その人の誇りや自信の源となることが考えられた。

2. 地域に根差した高齢者ケアの方向性

リロケーションの理由とリロケーションダメージの考

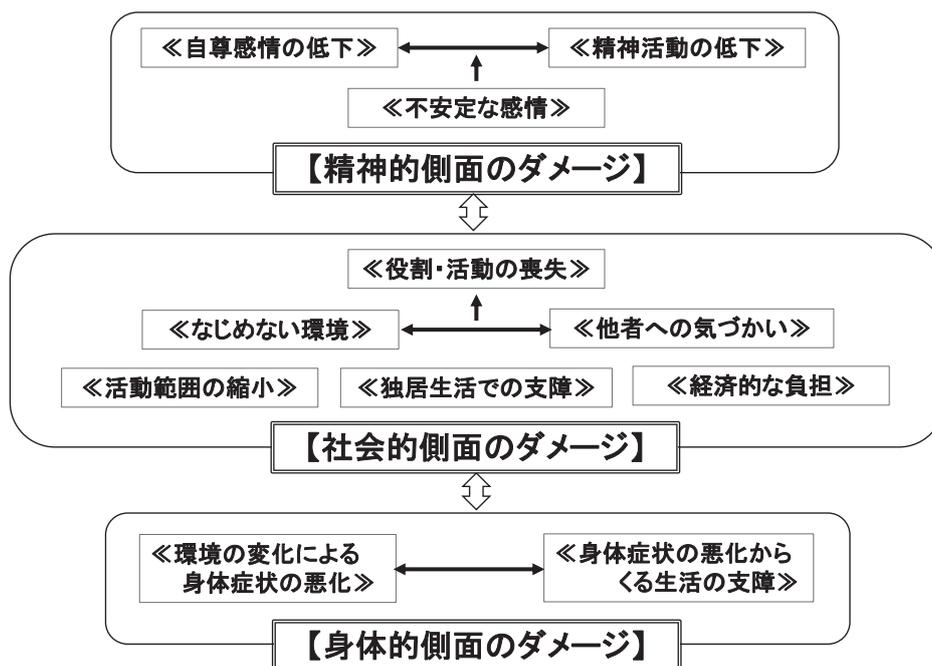


図 1. 高齢者のリロケーションダメージの構造

察から、示唆された課題は、住み慣れた場を離れることによる高齢者の発達課題、アイデンティティの揺らぎであった。

「人には重要な他者の死や別れを悼む喪が必要なように、アイデンティティを形成していた場所の喪失にも喪が必要」であり、「失われた環境の代替はない」と大谷 (2013) が述べるように、リロケーションは代替のきかないものを失わせる。最後まで住み慣れた場での生活を全うするために、場の持つ意味と住み慣れた地域が持つ力を捉え直す必要がある。

藤原 (2013) は「人間という生命体は『場所』(空間)の中で生まれ、生き、いろいろなものとの『関係』の中で『関係』と共に育ち、『時間』を堆積して『人生』を作り上げる。場所の上に関係を織り上げるのが生きることである。」としている。このような視点に立った時、高齢者のリロケーションは、住み慣れた場所の中での関係性を閉ざすことであり、堆積してきた時間やその上で紡いできたその人の歴史の連続性を絶つことでもある。しかし、要介護者であっても、生きがいや生きる力を取り戻す為に、その人の歴史を作ってきた場や人、出来事につなぎ合わせることは可能である。その実践事例として、大湾ら (2003) は、施設入所者で要介護高齢者を対象に、「生きているうちにふるさとの土を踏ませたい」と、「ふるさと訪問」に取り組んだ。要介護高齢者のふるさと訪問は、高齢者本人の生きがいにつながるだけでなく、瞬時ではあるが、家族、地域の人々との途切れた関係性を取り戻す効果があったと報告している。要介護状態になっても、連続している自分の過去とつながりを取り戻

すことは、生きがい、生きる力の源を取り戻すことでもある。

厚生労働省白書 (2016) の高齢者の意識調査によると、半数以上の高齢者が、住み慣れた自宅で人生の最期を迎えたいと希望していた。このことは、人は元来ひとり暮らしにであっても、要介護状態になっても、自宅で暮らし続けることを願うものであり、援助する者にとっては、そのような高齢者の思いに寄り添うケアが求められていることを意味する。また、稲葉 (2011) やカワチら (2013) は、当事者の持つ力、つながりの中での価値を新たな資源、社会関係資本 (ソーシャルキャピタル) としてその活用を提言している。

したがって、高齢者の医療や介護の重症度によるリロケーションは避けられずとも、高齢者の生活の場を高齢者が望む「自宅」を意識した高齢者ケアの方向性が求められていると考える。

V. 結論

1. 文献にみる高齢者のリロケーションの目的は、【リロケーション後の高齢者の心身機能の低下】、【転居高齢者の適応に関連する要因】、【呼び寄せ高齢者の自尊感情】、【呼び寄せ高齢者の介護】、【高齢者のリロケーションケアの方略】、【リロケーション概念の活用】であった。
2. 高齢者のリロケーションの理由は、【生活をする上での不安】、【心身機能の低下】、【社会的事情】、【自らの意思決定】、【自宅退院への希望】であった。
3. リロケーションダメージは、《身体活動の低下》、

〈身体症状の悪化からくる生活への支障〉の【身体的側面でのダメージ】、〈自尊感情の低下〉、〈不安定な感情〉、〈精神活動の低下〉の【精神的側面でのダメージ】、〈なじまない環境〉、〈活動範囲の縮小〉、〈他者への気づかい〉、〈役割の喪失〉、〈独居生活での支障〉、〈経済的負担〉の【社会的側面でのダメージ】があった。

4. リロケーションダメージは、3つの側面でのダメージが関連しあい高齢者の発達課題やアイデンティティの揺らぎをもたらすことが示唆された。超高齢社会では要介護高齢者の増加は避けられず、介護をめぐるリロケーションの減少は期待できない。したがって高齢者のリロケーションダメージにも着目した高齢者ケアの方向性が求められている。

文献

- エリクソン EH, エリクソン JM, キヴニク HQ. (1988/1999). 朝長正徳, 朝長梨枝子 (訳). 老年期; 生き生きしたかかわりあい. みすず書房.
- 稲葉陽二. (2011). ソーシャルキャピタル入門. 初版. 中公新書.
- カワチ I, 等々力秀美編. 藤原成一著. (2013). ソーシャルキャピタルと地域のカーブ球弧の伝統文化とウエル・ビーイング. 日本評論社. 197-212.
- 厚生労働省. (2013). 持続可能な社会保障制度の確立を図るための改革の推進に関する法律. law.e-gov.go.jp/htmldata/H25/H25HO112.html (平成 30 年 1 月 5 日).
- 厚生労働省. (2016). 平成 28 年版厚生労働白書—人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える—(本文). <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16/> (平成 30 年 1 月 5 日).
- 工藤禎子他, 三国久美, 桑原ゆみ, 森田智子, 安田玲子. (2006). 都市部における高齢者の転居後の適応と関連要因. 日本地域看護学会誌, 8 (2), 14-20
- 小松美砂他, 濱畑章子, 佐藤光年. (2013). 認知症高齢者の施設へのリロケーション, 適応に関連する要因と早期介入. 日本認知症ケア学会誌, 12 (2), 504-509
- 小松美砂, 濱畑章子. (2013). 日本における施設移転後の高齢者の適応. Jpn. J. Health Behav. Sci. 29 (2), 50-59
- 中西一葉. (2012). 高齢患者の自宅退院における「予測内」、「予測を超える」ダメージ: リロケーション第四形態の存在とリスク要因. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌. 8 (1), 21-30.
- 中西一葉. (2012). 高齢患者の自宅退院における「予測外」のダメージ リロケーション第四形態の存在と要因. 北星学園大学院論集第 3 号, 39-54.
- 中西一葉. (2013). 高齢患者自宅退院支援のツールに関する課題 リロケーション第四形態時のダメージ軽減を目的とした包括的システムの開発に向けて. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 8 (1), 21-30.
- 大谷華. (2013). 場所と個人の情動的なつながり—場所愛着, 場所アイデンティティ, 場所感覚—. 環境心理学研究. 1 (1), 58-67.
- 大湾明美, 佐久川政吉, 大川嶺子, 下地幸子, 富本傳, 根原憲永. (2003). 離島における施設入所高齢者の生きがいづくりに関する研究. 沖縄県立看護大学紀要, 4, 37-47.
- 斎藤 民, 李賢情, 甲斐一郎. (2006). 高齢転居者に対する社会的孤立予防プログラムの実施とその評価の試み. 日本公衛誌, 53 (5), 338-346
- 水野敏子. (1999). 東京近郊に転入したいいわゆる「呼び寄せ老人」の介護者の負担感とその関連要因の分析. 老年看護学, 13 (1), 79-88
- 瀬崎譲廣. (2014). 「場所」の社会学. 山口大学大学院東アジア研究科, 博士論文.
- 園田美穂. (2002). 住区への愛着に関する文献検討. 九州大学心理学研究, 3, 188-196.
- 古田加代子他. (2013). 女性主介護者からみた呼び寄せ介護の経験の特徴, 日本在宅ケア学会誌, 17 (1), 59-67.
- 古田加代子, 輿水めぐみ, 流石ゆり子 (2016). 転居高齢者の生活適応の経過に関連する要因ライフ・ライン・メソッドを用いた検討. 愛知県立大学看護学部紀要. 22, 45-53
- 渡邊美保他. (2014). リロケーションの概念分析. 高知女子大学看護学会誌. 40 (1), 2-12
- 渡邊美保, 野嶋佐由美. (2015). 災害後の高齢者のリロケーションケアに関する文献レビュー. 高知女子大学看護学会誌. 40 (2), 105-116.